

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員

福岡県病虫害防除所長

平成22年度病虫害発生予報第2号(5月)について

このことについて、病虫害発生予報第2号を発表したので送付します。

なし黒星病の防除対策を徹底しましょう!

4月中旬頃から、一部のなし園で果そう部に黒星病の発生が認められています。4月19日以降も降雨や曇天が続いていることから、今後も発生園の増加が予想されます。

羅病葉や罹病果は見つけ次第除去し、効果の高いDMI剤(スコア顆粒水和剤、アンピルフロアブル、インダ-フロアブル)で防除を徹底するよう指導願います。



葉柄での発病状況



幼果での発病状況

(⇨ : 病斑)

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。

気温は低いでしょう。降水量は並で、日照時間は並でしょう。

週別の気温は、1週目は低く、2週目は高く、3~4週目は平年並が高いでしょう。

要素別確率(%)

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	50	30	20
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

(福岡管区气象台 平成22年4月23日発表抜粋)

予報第2号

向こう1か月間の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

主な病害虫の発生予報概況

作物名	病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)	
		平年比	平年比	前年比
かんきつ	そうか病	並	並	並
なし	黒星病	並	やや多	やや多
ぶどう	黒とう病	並	並	並
かき	炭そ病 フジコナカイガラムシ	- 並	並 並	並 やや多
果樹共通	カメムシ類	-	- (平成18年並)	やや多
茶	カンザワハダニ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ	少 並 並	少 やや少 やや少	少 並 並

作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（+）は発生を助長する要因、（-）は発生を抑制する要因、（±）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【果樹】

1 かんきつそうか病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病葉率 0.6%（平年 0.1%、前年 0.1%）

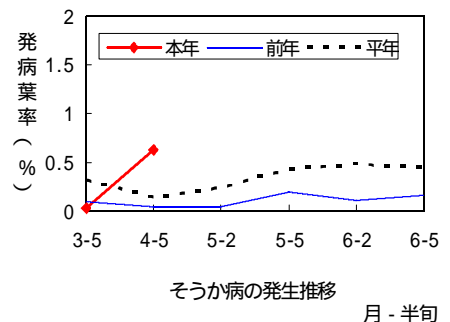
発生ほ場率 9.1%（平年 12.9%、前年 16.7%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は平年並とされている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 落花直後に、灰色かび病や黒点病との同時防除を実施する。

イ 罹病葉は見つけ次第、除去する。



2 なし黒星病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病葉率 0.1% (平年 0.13%、前年 0.07%)

発生ほ場率 9.1% (平年 13.0%、前年 16.7%)

イ 4月19~24日にかけて連続降雨があった(+)

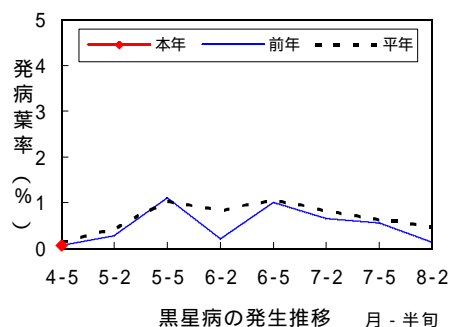
ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 罹病葉や罹病果は、見つけ次第除去する。

イ 多発園では、効果の高いDMI剤(スコア顆粒水和剤、アンビルフロアブル、インダフロアブル)で防除を実施する。

ウ 薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用は避ける。



3 ぶどう黒とう病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病葉率 0.5% (平年 0.7%、前年 0.4%)

発生ほ場率 9.1% (平年 10.8%、前年 8.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

罹病葉や罹病新梢は伝染源となるので、見つけ次第除去する。

4 かき炭そ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 前年10月2半旬調査の結果、発生量は少なかった(-)。

発病果率 0.8% (平年 1.9%)

発生ほ場率 21.4% (平年 60.9%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

罹病枝は伝染源となるので、見つけ次第除去する。

5 かきのフジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年並・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

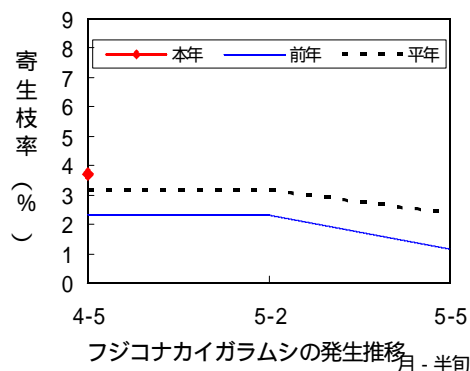
寄生枝率 3.7% (平年 3.1%、前年 2.3%)

発生ほ場率 69.2% (平年 54.7%、前年 35.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

天敵への影響が少ない薬剤で防除する。



6 果樹共通のカメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：前年よりやや多、平成18年並

(2) 予報の根拠

ア チャバネアオカメムシの1㎡当たりの越冬量は、平均2.0頭（前年1.3頭、平成18年1.8頭）で、前年よりやや多く、平成18年並であった（+）。

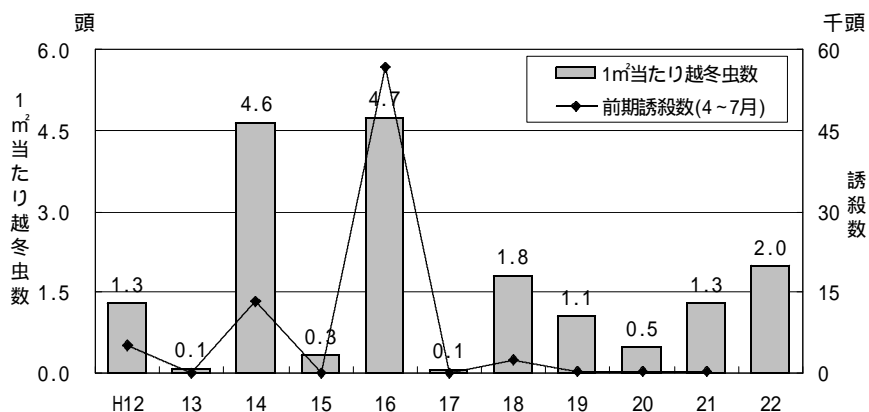


図 チャバネアオカメムシの1㎡当たり越冬虫数及び県下6か所予察灯の前期(4~7月)平均誘殺数の年次推移

(3) 防除上の注意

ア カメムシ類は夜温（14 以上）が高くなると活動が活発になるので、気温の推移や地域の予察灯の誘殺状況を確認し、園への飛来状況に注意する。

イ 平成18年は前期（4月～7月）に発生がやや多かったため、ウメ、モモ、スモモ、ナシ、カンキツ等では、園内での発生状況の把握に努め、発生に応じて防除を行う。

【果樹・その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
かんきつ ミカンハダニ	やや少	やや少	少	<ul style="list-style-type: none"> ・ミカンハモグリガやハマキムシ類との同時防除を行う。 ・発生初期に防除する。
アブラムシ類	少	やや少	やや少	
なし アブラムシ類	並	並	少	<ul style="list-style-type: none"> ・発生初期に防除する。

【茶】

1 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

寄生葉率 0.9%(平年 2.8%、前年 1.7%)

50葉当たり虫数 0.7頭(平年 8.8頭、前年 6.2頭)

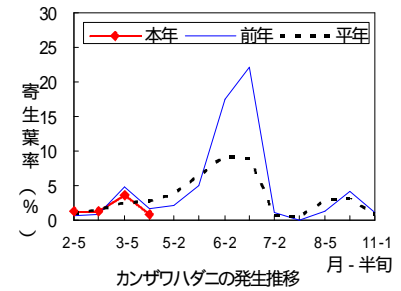
発生ほ場率 42.9%(平年 44.2%、前年33.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並とされている(-)。

(3) 防除上の注意

ア 一部多発園も見られることから、発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上の園では、摘採後、速やかに防除を行う。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)

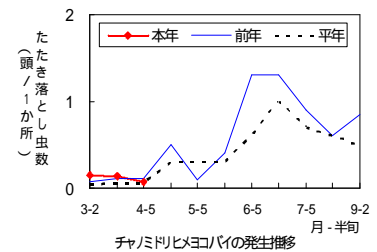
たたき落とし虫数 0.07頭(平年 0.05頭、前年 0.11頭)

発生ほ場率 13.3%(平年 13.0%、前年 38.9%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並とされている(-)。

(3) 防除上の注意

一番茶摘採後、または二番茶の萌芽から開葉期を重点に防除する。



3 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)

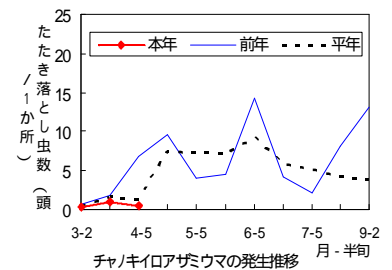
たたき落とし虫数 0.48頭(平年 1.3頭、前年 6.8頭)

発生ほ場率 86.7%(平年 58.2%、前年 55.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並とされている(-)。

(3) 防除上の注意

一番茶摘採後、または二番茶の萌芽から開葉期を重点に防除する。



【野菜・その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
アスパラガス 斑点性病害	-	並	並	<ul style="list-style-type: none"> ・擬葉展開後に予防散布を行う。 ・ハウスのつま面を開放し、湿度の低下を図る。
アザミウマ類	並	並	並	<ul style="list-style-type: none"> ・葉や若茎の穂先に発生するので、早期発見に努め、発生初期から防除する。 ・ハウス内外の除草を徹底する。

農薬の適正使用、飛散防止対策の徹底を！

全ての農薬の残留基準が農作物毎に設定され、基準値を超えた食品（農産物）は販売が禁止されます。

農薬の使用に当たっては、ラベルをよく確認し農薬の使用基準を厳守するとともに周辺に飛散（ドリフト）しないよう環境への配慮を十分行って下さい。

1 農薬適正使用の徹底

適用作物、使用量、濃度、使用時期、使用回数など、ラベルを確認し使用基準を遵守する。

噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

他作物が隣接している場合は、なるべく双方に登録がある農薬を使用する。

2 水田では止水期間(1週間程度)を厳守

水田において農薬を使用するときは、止水期間を1週間程度とし、落水・かけ流しをしない。

3 飛散防止対策の徹底

風、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

4 防除履歴の記帳

薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳する。

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除について、ホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jpnp.ne.jp/fukuoka>
電子メール kfok0301@sp.jpnp.ne.jp